

2024.9.1

# 現代俳句千葉

154号

巻頭エッセイ

## 好奇心という「風船」

幹事 鈴木瑩子



私は、戦後生まれの団塊世代の一人です。大方は何もない貧しい時代でした。長子長女の私は、好奇心いっぱい少女でした。楽器を弾きたい、バレエをしたいなど、夢は膨らみましたが、大人の事情などの空気を読む子でしたから、叶いそうもない夢はすぐに諦めました。

大人になった私は、働いて稼ぐことを知り、夢の風船は働けば叶うものになりました。

水彩画、日本画、和裁、着付け、華道、かな書道、茶道、パソコン等々経験し、夢の風船は私を成長させてくれました。

平成十九年七月、私は定年退職を機に、残りの人生を楽しく充実を感じるものにしたと時間をかけて、取り組めるものを考えました。幸か不幸か独身で通っていましたので、持てる財布は一つ、生きる、食べる、楽しむをすべてこのひとつ財布で賄うべく、私はお金の掛か

る習い事は止め、ボケないように頭に刺激を与えようと考えました。水彩に通っていた時、「俳句」に誘われたことを思い出しました。その時は、意に介さず終わりましたが、はたと思い出し、「俳句」という風船を選んだのです。

ちよつと作り方のコツを教わりに行こうと、呑気な考えで近くのカルチャーの門を叩きました。月に一回、持ちより三句で始めましたが、季重なりや季なし等々、歯が立たず一蹴されました。もう私にとって最後の風船なので、厭になることは有りませんでした。

加齢もあり、萎みそうな風船ですが、この風船を萎まないように、今、私はひとりてぶらぶらと外出し、緑陰の風となり、知らない街のバスに乗り、流れる車窓の風になり、好奇心の「風船」を膨らませていきます。

こんな時間が好きになりました。「風船」の糸の先には、「俳句」がぶら下がっています。今年喜寿の歳になりました。明日も何処かへぶらぶらと・・・。

### 目次

好奇心という「風船」 鈴木瑩子	1
諸家近詠	2~3
私の感銘句	4~5
津田沼研究句会報告	6
青葉研究句会報告	6
柏研究句会報告	6
君津研究句会報告	6
いすみ安房研究句会報告	6
強化部だより	7
会員・会友の近況	7
図書紹介・掲示板	8

千葉県現代俳句協会会報

諸家近詠

椎名 鳳人

天と地を丸洗いして風光る  
でこぼこの日本蝌蚪が泳ぎ切り  
毒舌は健在墓が仁王立ち  
半円の風光り合う眼鏡橋

高橋 宗史

わがことを叱るわれ在り冴返る  
風ありや無きや木犀が近い  
抗いのすがた曠野の冬すみれ  
日本に住めるよろこび春霞

島 隆史

荒波を北へ北へと初鯉  
億年と言う時埋めて化石立つ  
にぎわいの輪島朝市初夏の海  
通信簿見せ合う仲間柿若葉

末廣 陽恵

角田川愁いを岸の花陰に  
学校の銀杏の若葉目覚めたり  
ロックフォールに日向夏サラダの日  
産直の浅草海苔を炙ろうか

中嶋 三雄

白蝶や太陽系の夜が来る  
ゴルビーの逝く八月の銃後かな  
月明に開く天守の設計図  
石榴挽ぐ空は神代の青さなり

徳吉洋二郎

敗戦忌叩いて回すジャムの瓶  
しゃぼん玉天上はどこも自由席  
後輪が前輪を追う師走かな  
海鳴りは地球の軋み寒椿

松澤 伸佳

年豆や五万年後の篝星  
欠けた歯に小さき春の朏しあり  
急がない旅の終わりの墓蛙  
鉦叩チラシの裏のラブレター

松本 千花

道連れの白馬を帰す石清水  
鳩に道ゆずったりして聖五月  
金雀枝の介入だろう妻しずか  
雨靴のふちどりみどり走り梅雨

並木 邑人

さくらさくら原罪とやら初期化せり  
春潮をすする岩鼻わが流寓  
馬の目に逃水見えているかしら  
曼荼羅を抜け出たがっている夏蚕

無 子

新春吉日ケータリングのポツタルガ  
啓蟄やスナフキンの弾くギター  
俯瞰してすこし右寄り紫木蓮  
逆縁のわれ臙夜をSEIKO JAZZ

千葉 信子

ビー玉のころがつてくる原爆忌  
父の日や精子保存して戦場へ  
ほんたうは火の鳥の舌椿落つ  
鼻の眼のなかにある動けない

松村 五月

人間にでこぼこ薔薇の散つてより  
数人は列をはずれて春の葬  
東京に空あり燕飛ぶために  
空っぽになりたし雨は暖かし

林 みさき

煮凝や命輝くごとくあり  
梅の花数へるほどに人の死ぬ  
春の陽や草の匂ひの紙コップ  
武器捨てし祖国と思ひ花仰ぐ

増田 豊子

小満や手足の爪のよく伸びる  
蚕豆の床に転がる静かな日  
卯の花腐し修正液の蓋の音  
紫陽花の赤色が好き晴れ女

馬場 馬子

紫陽花の日帰りコース伴は杖  
結局は柿の木を買う八十の夫  
老鶯やこの道一茶も歩きをり  
介護予防の散策よ梅雨晴間

松本 悦子

レモン絞る時悔恨のあらたなり  
厚切りのレモンに託す今日のあり  
吾がインコバナナのすぢを好みたる  
食卓にくれなるの薔薇何の日ぞ

橋本志津子

席譲られて片陰の人となる  
一人で一泊そらまめさんの絵本  
鬼は外アンパンマンの吸入器  
約束を積みすぎたのか飛花落花

菱木 良一

父の顔知らぬ我が手に蚩来る  
白神の山滴るや大気澄み  
心中に鉛の重み原爆忌  
山畑の乾く風音麦の秋

細根 葉

ほんとうの涙は一度冬の月  
徘徊の途中葱坊主と遊ぶ  
旅立ちの友よ泰山木の花  
嗚猛る俺の骨ならくれてやる

富田 茂

葛餅や抑えた甘味父の影  
ネモフィラの青に繋がる空の青  
暑すぎて子犬が路に腹這いに  
洗濯物軽くなつたね夏物で

浪岡 玄

空といふ出口ひろびろ夏休み  
椋鳥群れてたちまちヨハネ黙示録  
蟻螂の鎌の下にある 時間  
月におります電話に出られません

宮 たかし

氷水カランと回す聞き上手  
水際の泥の蠢く蟹の音  
星の恋星の寿命の尽きるまで  
断崖に寄する波濤と夕焼けと

永妻 和子

草引けば要の石に朝が来る  
地に問えば天に声あり沙羅の花  
城壁と見紛うビルや夏の月  
再会はレトロな駅や夏柳

保坂 末子

春が来た持ち物全部に名を入れて  
朝ぐもり片目崩れし目玉焼  
まくなぎの徒党に触れし偏頭痛  
濃あじさい鬱という文字ややこしい

野口 京子

曲線の少し尖つた梅雨螢  
半夏雨光と影の宇宙ゴミ  
処暑過ぎの踵を軽く夕空へ  
洪沢人気酷暑日の新紙幣

星野 一恵

花石榴路面鏡よりブレイキ音  
思いきり回転ドアを押せば夏  
アルバムに若きざわめき山開き  
身の内に蟬の音止まぬ木が一本

福田志津子

梅光り雨の近づく匂ひかな  
ひと仕事終へてゆるりと春の雲  
茅花流し友逝きしこと電話ベル  
競り合ひに負けず見開く鮪の眼

袴田 菊子

鶏：兎とり替えてきた遠い夏  
当てのない旅に出ようか遠蛙  
扱花のねじれ具合を確かむる  
たくさんの指紋のこした蠅叩

三上 啓

早稲田におきざりにされ時鳥  
庭先で旅愁奏でるラベンダー  
修復の隣家の屋根にほととぎす  
白髪と夏草に囲まれ息高し

中村 冬美

線描の裸婦の息づく聖五月  
合歓の花眠りしあとも微熱して  
梅雨深し反古の嵩みし文机  
縄文の土器に色射す新樹光

松岡 節子

青梅雨やかがり手毬の木綿糸  
少年のリユックに秋陽日本棋院  
味噌汁の田螺の苦き故里よ  
カーネルサンダースの道に迷ひし緑の夜

増田 元子

山法師風のチャイムを二回ほど  
夏羽織するり嘶は佳境へと  
吸い込まる大きな森の小さき滝  
夏落葉降るや水面は酸欠に

三宅たくみ

春衣体で風を受けるため  
夏帽の子等の歓声水族館  
晩秋の四阿俳人たちの距離  
都会の夜高層ビルはクリスマスツリー

羽村美和子

月見草きのうの錆びた昼がある  
ががんぼの足が押さえて世界地図  
秋桜コスモスどの神に祈るべき  
アバターは狙撃の名手夕紅葉

中山 皓雪

朗朗と詠ふ卒寿や淑気満つ  
原子炉を抱へし村の春時雨  
潤沼晩照影絵となりぬ蜆舟  
古稀傘寿卒寿と生きて一重帯

中村 博子

春潮に磨かれていたる舳い船  
下総の水湧くところ夏兆す  
杉の秀の朝霧散らし尾花沢  
山茶花の淡き夕陽を含みたる

# 私の感銘句

福田志津子

作者名 号頁

ホスピスの白き扉に春の蝶

佐々木幸子 148 2

脳トレの一日一句穴感ひ

岡崎 翠 148 2

ドリブルや辿り着きたる大晦日

國分 三徳 148 2

天高し明日歩くため今日歩く

長濱 聰子 150 3

安房の国継ぐ人のある苗代田

中村 博子 150 3

ひらめきは鋭角にくる小鯨刺

林 ゆみ 151 4

デジタルの波にさまよう黄落期

村上 澄子 151 5

ホスピスの白き扉に春の蝶

佐々木幸子

皆さん春の蝶、ちようですよと、まだ希望があるのですと、明るい声が聞こえて来そうな一句です。

鹿兒島俊之

紙袋ほだいてひらき二百十日

鈴木 瑩子 150 3

房総の背をうねらせる青嵐

福田志津子 150 3

トラックを逃げた鰯の光舞ふ

福田志津子 150 5

大空の点より生まる初すずめ

馬淵 津枝 151 4

草矢射る下総ことばやわらかく

山口 彩子 151 4

はるばると睡魔を連れて春の旅

宮本美津江 151 5

秋深しハシビロコウ化してる夫

豊崎まゆみ 151 7

秋深しハシビロコウ化してる夫

豊崎まゆみ

嘴広鶴の哲学者然とした立ち姿には魅了されます。この句を一読し、思わず笑ってしまいました。秋の夜長に静かに思索を巡らしている夫、それを暖かく見つめている妻、仲の良い老夫婦が目に浮かびます。

泉 志眞子

水馬円周率を抜け出せず

長井 寛 149 8

夕刻をはみ出して来る残暑かな

徳吉洋二郎 149 8

人の世に托卵のあり麦の秋

田沼美智子 149 9

狐火の誘いに原発再稼働

鈴木まんぼう 149 9

十年日記父の無念に風入れる

長濱 聰子 150 3

炎天のどこを向いても黄な臭い

袴田 菊子 150 4

われもまた可燃性なり楡紅葉

浪岡 玄 150 4

宮本美津江

飯の世の飯の噓をして晩年

塩野谷 仁 148 3

憲法記念日卵黄くずれないように

小川トシ子 148 4

飛花落花棲めば都の温度あり

高桑婦美子 149 9

雨のち黄砂そして総理を撃つ男

武田 伸一 149 9

式神を箒で払う女正月

並木 邑人 150 3

物物交換漬物石で栗貫ふ

増田 豊子 151 4

膝割って話す野田っ子いぼむしり

山崎 政江 151 6

飯の世の飯の噓をして晩年

塩野谷 仁 151 6

長く続いたコロナ禍で飯の世という感慨が深くなる。世の中が落ち着き始めてからの飯の噓という言葉には実感がこもる。晩年という言葉にはややマイナスイメージもあるが、まだまださあこれからだぞという余裕もある。

森 孝子

無音なる死者との会話散る桜

小野 裕文 148 4

下総の月夜に太るけむり茸

越野 雄治 148 5

寒波来る遠近法でやつてくる

徳吉洋二郎 149 8

天高し明日歩くため今日歩く

長濱 聰子 150 3

房総の海が好きです枇杷の花

星野 一恵 150 5

ふたりです空想老人の晩夏

山中 葛子 151 4

ラベンダーふわり封書の小窓から

馬淵 津枝 151 4

保坂 末子

敗戦日這ひつくばつて畳拭く

神作 仁子 148 4

ごつこうと山動かして木の芽吹く

長井 寛 149 8

蟬梅のたましい抜けてゆく香り

岡田 春人 149 9

十年日記父の無念に風入れる

長濱 聰子 150 3

房総の背をうねらせる青嵐

福田志津子 150 3

手のひらの力を抜いてひなあられ

松澤 伸佳 151 4

やわらかき息吐いている冬董

森須 蘭 151 5

山口 彩子

白菜をひらけば昼の渚なり

久野 康子 148 2

深眠り春の真ん中シーラカンス

大見 充子 148 3

明け方の釣舟草に亡夫を乗せ

下村 洋子 149 8

人の世に托卵のあり麦の秋

田沼美智子 149 9

笹舟のおぼつかなきも風のせて

鈴木 瑩子 150 3

布子着て百歳まではページ繰る

中山 皓雪 150 4

十三夜こえを出さねばさびしくて

山崎 聰 151 5

明け方の釣舟草に亡夫を乗せ

下村 洋子

俳句は作者の声が発進され心が動かされる。それは俳句の持つ魔性でもあろうか。掲句は釣舟草に亡夫を乗せる明け方の夢であろう。夫に先立たれた者にとってしみじみと胸に迫って来る。釣舟草の花の色を伴って。

菊地 喜己

日向ぼこ天国ですなお前さん

馬場 馬子 150 3

トラックを逃げた鰯の光舞ふ

福田志津子 150 5

月見草死にたくなくて死の話

馬淵 津枝 151 4

昭和の日昭和を削る乾物屋

矢野 忠男 151 4

真間の井の水波む音して春おぼろ

羽村美和子 151 6

秋の潮江戸を語るは三番瀬  
追えばまた数増して来る稲雀

馬場 馬子

ドリブルや辿り着きたる大晦日  
独りとは自由不自由吾亦紅  
八月の空の重さを昭和という  
桜どき「侍ジャパン」V得たり  
戦争は虚構の末路枯れ蓮田  
関東の片隅におり蜘蛛の糸  
父の日の醤油をはしく目玉焼き

池田 幸

猫の恋上目遣いの顔の傷  
人の世に托卵のあり麦の秋  
狐火の誘いに原発再稼働  
十年日記父の無念に風入れる  
詩心が翔ぶたんぼの絮に乗る  
拾ふなよその手袋につかまれる  
星月夜魔女であるには箒朽ち

阿部さくら

老いらくの恋は夜更けの遠火花  
かまきりの振り向きさまの目に殺意  
菜の花は人を待つ色野島崎  
何もせぬことへの疲れ遠火花  
寒波来る遠近法でやってくる  
沈む太陽夏空を使ひきり  
星月夜魔女であるには箒朽ち  
老いらくの恋は夜更けの遠火花

本橋 孝之 151 6  
羽矢 真人 151 7

國分 三徳 148 2  
神作 仁子 148 4  
徳吉洋二郎 149 8  
田端 重彦 149 9  
野口 久 150 3  
山崎 聰 151 5  
村田 珠子 151 5

鈴木 房州 149 9  
田沼美智子 149 9  
鈴木まんぼう 149 9  
長濱 聰子 150 3  
樋口 博徳 150 4  
浪岡 玄 150 4  
宮下 奈緒 151 4

佐久間眞城 148 3  
小野 裕文 148 4  
大見 充子 148 5  
片岡伊つ美 149 8  
徳吉洋二郎 149 8  
中里 結 150 4  
宮下 奈緒 151 4  
佐久間眞城 151 4

人はいくつになってもときめく心を持ちたい  
ものです。「老いらくの恋」は人生の終りに一  
瞬輝いたはかない、まさに花火のようなものだ  
と共感いたしました。

中村 博子

夕ひぐらし魂たまげ函いくつ開け放ち  
捕つ込めの逃げ切る馬よ春開ける  
結香の花荒行の声洩れてくる  
十年日記父の無念に風入れる  
沈む太陽夏空を使ひきり  
降り立てば諸味の風や花がすみ  
余花未だ玉川旅館閉館す  
沈む太陽夏空を使ひきり

二十余年人生の師と仰いできた結さんが急逝  
なされた。吟行をこよなく愛し「私の句は自分  
の足で稼いだものばかり」が信条だった。亡く  
なる数ヶ月前に残した掲句に涙した。俳句はも  
ちろん生きている道標に感謝申しあげます。

鈴木 瑩子

夏蝶の影ゆらぎゆく海鼠壁  
二階には二階の時間鱗雲  
百歳を待たうぢやないか月見豆  
書き出しの泥濘にいる青鮫忌  
よもつひらさか粉殻を焼くけむり  
月見草死にたくなって死の話  
青葙の沼茫々と今むかし  
月見草死にたくなって死の話  
たぶん誰れでも、死ぬことは他人事のように  
思うと思います。覚悟ができる死に方はそう

清水 伶 148 3  
河合 利枝 148 5  
佐藤 禎子 148 5  
長濱 聰子 150 3  
中里 結 150 4  
三浦 侃 151 6  
宮本美津江 151 6  
中里 結 151 6

金 蘭 148 4  
佐藤 禎子 148 4  
無 子 149 9  
並木 邑人 150 3  
細根 栗 151 4  
馬淵 津枝 151 4  
山口 彩子 151 6  
馬淵 津枝 151 6

いと思います。夜に見る月見草の黄色は、少し  
不気味で死の話が出ることに頷きます。

興津 恭子

月光の投網のかかる枯はちす  
物言いの鋭角になる寒い夜  
狐火の誘いに原発再稼働  
鳥雲に入るシェルターも墓も無し  
安房の国継ぐ人のある苗代田  
春愁の張りついている左肩  
てのひらに夜が来ている金魚の死  
月光の投網のかかる枯はちす

上野の不忍池の風景を思いました。一面の枯  
はちすの蕭条たる景に降りそそぐ月の光、まる  
で投網のかかったように。深深と冷えた冬の夜  
の景が浮かんで身の縮る思いを感じました。

戸邊 光一

筒抜けの密談冬の白牡丹  
百年後の我は焚火の中にいる  
式神を箒で払う女正月  
風鈴に若き日の音交りおり  
脈々と伏流水あり秋の声  
難聴のふしぎな返事紅葉して  
春一番火伏の神とギター弾く  
筒抜けの密談冬の白牡丹  
とかく内緒話など他人に知られたくないか  
ら「ヒソヒソ」と誰れも居ないと思っても壁に  
耳ありで洩れやすい。それを聴いてしまった人  
は、他に話すことも憚る場合もある。冬の白牡  
丹が妙に訴えてくる。

坂間 恒子 148 2  
川上 典子 149 8  
鈴木まんぼう 149 9  
高木 一恵 149 9  
中村 博子 150 3  
中村 冬美 150 4  
山崎 政江 151 5  
坂間 恒子 151 5

椎名 鳳人 148 3  
小林 実 148 3  
並木 邑人 150 3  
星野 一恵 150 4  
実 繁 151 4  
山中 葛子 151 4  
南川 好玄 151 5  
椎名 鳳人 151 5



津田沼研究句会報告

第三八〇回 (令和六年五月十四日)

(於：津田沼一丁目町会会館)

司会 小林 実

春出水玉手箱から「温暖化」 鈴木 瑩子
街騒のハイド氏になる夏帽子 長井 寛
麦笛は黒穂で瘦せつぼち同士 高木 一恵
駆け落ちの宿に金雀枝真つ盛り 小林 実
花は葉に手擦れに光る御賓頭盧 村上 澄子
サングラスはづしよくみる鮭サブレ 増田 豊子
「はあもう来ん」とバス待つ人のどけしや 栗原 正子
免許返納五月の風に追いつけず 星野 一恵
連発のマシン片手でしゃぼん玉 大喜 京香
初鯉声なき声にせかされて なかもと淑子
ふうせんや虚ろを込めて生き急ぐ 池田 博臣
聖五月ジブリの森は眠らない 徳吉洋二郎
燕飛ぶ百年先へごきげんよう 白木 暢子
牛蛙功少なきを破顔いけり 並木 邑人

青葉研究句会報告

第一五四回 (令和六年六月二十七日)

(於：千葉市民会館)

司会 徳吉洋二郎

縄文の地貌囃して白雨かな 栗原 正子
息災をかぐやと交わす月見草 長井 寛
トンネルの出口アフリカ地雷 池田 博臣
核保有どこまでふゆる青葉園 鈴木まんぼう
青簾ことばの無頼に命懸け 並木 邑人
波の音玉ねぎ吊りし雨情生家 横山 郁子
勘違ひの深読みばかり五月雨 越野 雄治

柏研究句会報告

第一四一回 (令和六年七月十三日)

(於：柏市ハックルベリー書店)

司会 岡田 春人

人間の臍に棲みつく姫螢 徳吉洋二郎
姫沙羅の咲きみちるかに石畳 森井美恵子
梅雨最中窓越しに見る時計塔 山崎 幸子
大鰻昭和の煙もうもうと 加賀谷秀男
輪唱や林と林つなぐ蟬 高橋 宗史
ニッポンがくの字に曲がる猛暑かな 松澤 龍一
死の淵は眩しくないか道おしえ 下村 洋子
綺羅星と紛う山河の蛍狩 長井 寛
口論の隙を与えず百合真白 小野 功
マニキュアの赤ひらひらと水を打つ 川上 典子
半夏雨光と影の宇宙ゴミ 野口 京子
対峙する兜太・AI・兜虫 椎名 鳳人
生かされて成すこと多し八月来 岡田 春人
夕焼けに押され会いにゆく雲梯 山口 明
卒寿の辯チューハイ空缶並べ立て 佐藤 鈴子
白靴やローマへ続く道がない 木之下みゆき
ローアングル子規の目線の庭の花 藤好 良

君津研究句会報告

第五十二回 (令和六年七月四日)

(於：君津市生涯学習交流センター)

司会 徳吉洋二郎

青大将深手を負つて石になる 加藤 法子
水溜まり跨ぐ入道雲跨ぐ 山田たかし
梅雨深し詩壇の森に迷い込む 徳吉洋二郎

いすみ安房研究句会報告

第三回 (令和六年七月二十八日)

(於：勝浦駅前「ふじや」)

司会 高橋宗史・東 國人

どくだみを引き抜く力鬱を抜く 田沼美智子
ころころと変る言い分け蜥蜴の尾 村田 満枝
無為の日のこころの渴き楸郵忌 長濱 聰子
角出せと言われ拗ねてる蝸牛 前田 孝子
夏椿写経の机深く座す 森 孝子
静寂を深呼吸するほととぎす 泉 志眞子
夏木立二人で登る八十路坂 古賀 壽昭
初挽ぎをためらわせるや茄子の艶 大地 節子
夜半の夏君は若いまま夢に出る 佐藤 鮎美
涼風や唐十郎のにたり顔 並木 邑人
小上がりの一番客で冷奴 越野 雄治
深閑と尼寺愴然と二重虹 石井紀美子
ステテコやバンコ持ち出すへば将棋 羽矢 眞人
須弥山の遥か上空天道虫 長井 寛
ほたる火や坂の疎水をゆつくりと 北野 耕兵
のほほんとして生きて長寿や髪洗う 小澤 富子
百獣の王やひまわり風来れば 高橋 宗史
流水の沈黙深し夏座敷 坂間 恒子
サーファアの遥か西方ガザの海 柴田 洋吾
更衣わたしが連れてくるわたし 鈴木卯ノ花
阿ねいてときに溺れる河童の忌 長井 寛
初夏の鳶さらわれたくなる空がある 羽村美和子
しゃがしゃがと主なき家の小判草 徳田 悠子
遠流にはあらず牛蛙のチューバ 並木 邑人
カサプランカそばかず少女いなくなる 東 國人

## 強化部だより

### 涼しい勝浦で研究句会

いすみ安房研究句会は七月二十八日に第三回を実施、四回は九月二十二日に行う。奇数月の第四日曜日十二時集合、JR勝浦駅前の蕎麦屋さん「ふじや」を会場にしている。当地の参加者は欠席投句の人も含め七名と未だ少ないが、ベテランも若手も意気軒高、当初の固さが取れて句会を楽しむ雰囲気も生じている。

第三回では、欠席投句者に選句にも加わってもらった。千葉市方面からの参加者には歓迎も感謝もしている。今後ともよろしく。投句は当季雑詠五句、句会の十日前まで、強化部の高橋へ（来年担当は東さんの予定）。入り江勝浦の七月は涼しかった。地形から来るのか、夏涼しく冬暖かが勝浦らしい。緩やかかモットーでも皆不転の積りです。

### 第六回あしたば句会（七月開催）

黒揚羽いまいたはずの子がいらない 鈴木卯ノ花  
 大夕焼きみの心へ盗撃 羽村美和子  
 上野の風鈴五列目の自意識 松本 千花  
 サングラス着信音は裕次郎 徳吉洋二郎  
 吾を包む風は生きてる夏野原 佐藤 鮎美  
 喪の瓜を鷹羽狩行のパセリほど 無 子  
 戦争がありレイバンのサングラス 石井 稔

目高にも体貫く背骨あり

青野 友香

571円ちようど払って梅雨晴れ間

三宅たくみ

半夏生撫牛腰の黒光り

矢野 忠男

畑見る母のため息夜盗虫

東 國人

終戦記念日天窓に影走る

森井美恵子

紫雲木そこはかとなくジャポニズム

遠藤 寛子

腐草螢となる列柱より関羽

並木 邑人

夏雲システムを使用し、兼題「目高」「羽」でわれました。次回の句会は九月です。

参加希望の方はご連絡ください。

kokomiya2003@yahoo.co.jp (青年部・三宅)

### 初心者講座 第二期

#### 第三回〜五回

ドア開くミンミンの声ドア閉まる 横須賀弘子  
 喉舌ピリリあの夏のココアコーラ 秋山 綾子  
 お坊様散華は今朝のこの蓮を 栗原 正子  
 向日葵の全視線吾にビリビリと 荻野由美子  
 のそのそと僕と毛虫の通学路 宮原 青佳  
 存分に泣く紫陽花の花の中 山崎 幸子  
 祭笛そでに残りし仕付け糸 矢野 忠男  
 ダリア群落曇天を捕まえる 高橋 宗史

第四回目には高橋宗史副会長も参加。当初は皆少し緊張気味でしたが、句評で盛り上がり楽しい講座になりました。九月はお休みで、十月十九日より後期講座が始まります。後期からの参加も大歓迎です。

(羽村美和子記)

### 《会員・会友の近況》

- ウクライナやガザ地区の報道にはいつも胸が痛みます。「現代俳句千葉」いつもありがとうございます。(中嶋 三雄)
- 九州男児が主夫業を始めて一年半、スパーの買い物にも慣れた。料理は出来ないが、次は台所俳句に挑戦しよう。(徳吉洋二郎)
- 五十代最後の一年になりました。俄かに多忙が降ってきて仕方ない、まだ五十代だからと。還暦を心待ちにしています。(無 子)
- 三月に上梓した私の句集「レクイエム」が一五三号に図書紹介されていて驚きました。親切に感謝いたします。(千葉 信子)
- 膝が悪いため、できるだけ動かすよう気をつけて過ごしています。(馬場 馬子)
- 諸々の事情で、孫二人を預かることが多くなりました。孫との暮らしの中、成長を見守れる幸せを感じつつ、奮闘の日々を過ごしています。(橋本志津子)
- 俳句に触れている時間だけを糧に、二病・三病と騙しだまし生活しております。(保坂 末子)
- 日々の暑さに地球の温暖化は深刻を増します。庭の草取りが大変です。だからマンションが良いかなと思う今日この頃です。(野口 京子)
- この暑さ暑さは大変です。句が中々纏まりませんでした。(福田志津子)
- 毎日が日曜日、主人の七回忌も済ませホッとしております。時々大事なことを忘れてしまいます。これも晩年のエア・ポケットと思いい気楽に過ごしております。(中山 皓雪)

## 第二十五回現代俳句協会 年度賞に村田珠子さん

受賞作「霧の海」より

一木一草夏霧の海の中  
本閉じる誤訳のような梅雨の月  
昼這う蟻に原寸大の地図  
朝露や豊かに詛る牛の声  
かけのぼる炭酸の泡鳥の恋

### 図書紹介

#### ■「河東碧梧桐の百句」秋尾 敏

令和六年六月一日刊 ふらんす堂

「新傾向俳句」を指摘した碧梧桐の感性や自己表現の核心を知る上での道案内書。百句の解説と共に、巻末には「言語の日常性を超えて」が掲載。

### 掲示板

#### 《会員・会友異動》

●逝去 (会員) 久保 筑峯

(会友) 関谷ひろ子

●退会 (会員) 石崎多寿子、吉野 精

(会友) 秋山 勝男

(会友) 馬淵 津枝

#### ●新会員・新会友

歌代 美遥 (会員) 星野高士 紹介

江良 純雄 (会員) 大井恒行 紹介

渡辺 遊山 (会員) 大石雄鬼 紹介

長島雅余之 (会員) 大鋸甚勇 紹介

●住所変更  
岳 和子 (会友) 高橋宗史 紹介  
徳田 悠子 (会友) 高橋宗史 紹介  
鈴木 一行 (会員) 地区内移転

#### 《令和六年度第三回幹事会》

日時 令和六年八月二十日(火) 午後一時  
場所 船橋市勤労市民センター  
議題

- 一、創立四十五周年記念俳句大会について
- 二、令和六年度俳句大会の結果報告
- 三、令和七年度総会・俳句大会について
- 四、秋の吟行会 市原市・国分寺跡 国分尼寺跡について
- 五、青年部報告など
- 六、初心者講座報告など
- 七、現代俳句協会(本部)の動向について
- 八、会報一五四号について
- 九、各研究会の状況について  
(柏 君津、いすみ・安房、青葉、津田沼)
- 十、その他

- ① 令和六年度後期・七年度前期予定について
- ② 会員・会友動静
- ③ 次回幹事会 十一月十九日(火) 予定
- ④ その他

### ◆秋の吟行会のお知らせ

場所 上総国分寺跡・上総国分尼寺跡  
日時 令和六年十月二十七日(日)  
句会場 市原市市民会館  
瞩目二句 (投句締切十三時三十分)  
☆詳しくは同封のチラシをご覧ください。  
☆今回は欠席投句は行ないません。

※現代俳句協会令和六年度  
会費納入はもう、お済みでしょうか？

会費の一部は、千葉県現代俳句協会の活動費の原資となっています。まだの方は、お早めにお納め願います。払い込み用紙を紛失された方は本部事務局へ請求してください。

### □□事務局・編集部だより□□

●日本が初めてオリンピッククに参加したのは、一九一二年(明治四十五年)。選手は地下足袋を履いた金栗四三と三島弥彦。それから百年余、パリ五輪での日本勢の活躍は素晴らしかった。スポーツの持つ大きな魅力と底力に感動の日々であったが、俳句で人の心を掴むのは並大抵のことではないと思いを強くした。

現代俳句千葉 第一五四号  
令和六年九月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長 並木 邑人

現代俳句千葉編集部

〒278-0037 野田市野田

六七七-11A二二五

木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局

〒277-0084 柏市新柏二一三三六

岡田 春人

TEL・FAX 〇四一七一六一―一六三九